

非飽和名詞から飽和名詞へ、飽和名詞から非飽和名詞へ

— 「類」概念への認知言語学的アプローチ —

氏家啓吾・田中太一（東京大学大学院生）

1. はじめに

「作家」と「作者」は一見したところ類似の意味を持つが、興味深い違いがある。「あなたは作家ですか」という質問には「はい」か「いいえ」で答えることができるだろう。しかし、「あなたは作者ですか」と尋ねられた場合、どの作品の話をしているかがわからなければ答えることができず、返答に困ってしまう。「作者」という語は、それによって対象をカテゴリー化するには特定の参照事項（この場合は作品）が念頭になければならないという性質を持つ名詞なのである。この「作者」のような名詞を非飽和名詞といい、「作家」のような名詞を飽和名詞という（西山 1990, 2003）。同様の対比は「会社員・社員」「看護師・看護人」「作曲家・作曲者」「犯罪者・犯人」といったペアにも見られる。

このような例からは、飽和名詞と非飽和名詞は語彙のレベルで明確に区切られたカテゴリーであるかのように思える。名詞の語彙的な素性（[± 飽和性]）としてこれを定式化することが三宅（2000）によって提案され、この二分法は現在でも広く受け入れられている。しかし実際には、飽和名詞としての用法と非飽和名詞としての用法の両方が可能な名詞が体系的かつ大規模に存在する。また、通常は飽和名詞として使われる名詞が臨時的に非飽和名詞として使われることもある。両者は移行可能なカテゴリーであり、連続体をなしている可能性があるのである。この現象は一部の先行研究で言及されてはいるものの、いまだ系統立った探究はなされていない（菊地 1997, 山泉 2013, 三好 2017, 氏家・田中 2021 他）。

本発表では、(i) 飽和と非飽和の多義性を観察した上で、(ii) 飽和・非飽和の区別は類に基づくカテゴリー化とフレームに基づくカテゴリー化の違いに由来すると提案し、(iii) 「類」の性質から、特定の語が多義性を持つ理由の説明を試みる。単に語彙的な素性と捉えるだけでは両者の相互関係や連続性は見過ごされてしまうが、概念的基盤を考察することによって、観察される現象の背後にある原理を明らかにする可能性が開かれる。

2. 西山（2003）による非飽和名詞の定義

まず非飽和名詞および飽和名詞が先行研究でどう定義されているかを見る。西山（2003: 33）は、非飽和名詞を「「Xの」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延（extension）を決めることができず、意味的に充足していない名詞」と定義した。

たとえば「主役」をとりあげよう。あるひとについて、そのひとが主役であるかどうかは、どの芝居（や映画）を問題にしているかを定めなにかぎり、なんともいえない。ある俳優が、ある芝居では主役であっても、別の芝居では端役であるかもしれないからである。また、「主役だけ集まれ、端役は来るな」という命令は、問題にしている芝居（や映画）がコンテキストから明らかでないかぎり、従うことのできない不条理な命令である。

（西山 2003: 33）

「主役」は芝居や映画をパラメータに取る非飽和名詞ということになる。一方「俳優」という語については、あるひとが俳優であるかどうかを問題にすることが原理的に可能であるとし、飽和名詞と呼んでいる¹。

この区別は、カキ料理構文と呼ばれる「Xは、YがZだ」の形の文の成立条件を説明するのに役立つ。この構文は一般に、Zの位置の名詞が非飽和名詞で、Xがその参照事項（パラメータの値）でなければ成立しない（西山 2003:6章）。「本場」や「主役」は非飽和名詞であり、「看護婦」「首飾り」は飽和名詞である。

- (1) a. カキ料理は、広島が本場だ。(cf. 広島が、カキ料理の本場だ)
b. この芝居は、洋子が主役だ。(cf. 洋子が、この芝居の主役だ)
- (2) a. ?この病院は、花子が看護婦だ。(cf. 花子が、この病院の看護婦だ)
b. ?娘は、これが首飾りだ。(cf. これが、娘の首飾りだ)

(3) 非飽和名詞の例

優勝者、司会者、弁護士、上司、社長、社員、先輩、妹、子ども、本場、タイトル、原因、結果、敵、癖、趣味、犯人、買い時、基盤、前提、特徴、目的、締め切り など

(4) 飽和名詞の例

首飾り、水、男の子、音、俳優、政治家、画家、ピアニスト、音楽家、ヴァイオリン、サラリーマン、教師、医者、小学生、紳士、机、車、自転車、バケツ、本、鉛筆、病気 など
(以上、西山 2003: 269f)

西山は、ある語が飽和名詞か非飽和名詞かは「純粋に意味論的なものであり、文法（とくにレクシコン）のレベルで規定されている」、「ある名詞がコンテキスト次第で飽和名詞になったり非飽和名詞になったりするということは考えにくい」と述べている（西山 2003: 38）²。とはいえ、少数ではあるが「飽和性に関して曖昧」な語があることも認めている。例えば「弁護士」は飽和名詞としての解釈と非飽和名詞としての解釈があるとされる。「わが町の弁護士」は、その町に住んでいる弁護士という解釈（飽和解釈）も可能だが「わが町は、山田が弁護士だ」というカキ料理構文では、その町を担当する弁護人の解釈（非飽和解釈）しかできなくなるとしている（p.279）。

3. 考察の前提

前提として、本発表の立場を整理しておく。西山（2003）は非飽和名詞を「Xの」という形で参照事項が指定される場合のみの均質なカテゴリーと想定している。しかし実際は、非

¹ 非飽和名詞に似た概念として、寺村（1975）の「相対性的名詞」、庵（1995）の「1項名詞」、生成語彙論の「事態レベル名詞」（Pustejovsky 1995）などがある。

² なお、西山（1990）では「非飽和名詞句」という用語が使われており、主に名詞句レベルの性質と考えられていたが、三宅（2000）はこれを語彙的な素性（ $[\pm]$ 飽和性）として定式化することを主張した。それ以降、基本的に語彙レベルの性質と考えられるようになった（西山 2003 参照）。

飽和名詞と参照事項の関係にはいくつかの点で多様性が見られる。

まず、山泉 (2010, 2013) が明らかにした通り、「太郎を殺した犯人」「火事になった原因」のように出来事を表す連体修飾節によって参照事項が指定される例も多数ある。さらに、「XをYに、…」という形式を持つ地図をたよりに構文(例:「体力の限界を理由に引退した」)では、Yの位置に非飽和名詞が現れ、その参照事項が主節によって表現される(山泉 2013, 氏家 2017)。参照事項の表現手段は様々である。また、復元可能な場合は言語的に表現されない場合が多い。さらに、例えば「歩行者」という名詞は、ある特定の交通状況において(車との対比で)歩いている人の役割を表す語である以上、特定の場面を念頭に置かなければある人を歩行者かどうかいうことはできないが、これが「Xの」や連体修飾節の形で表現されることは極めて稀である。しかしそうであっても、何かを参照しなければ対象を歩行者としてカテゴリー化できないという点を重視するなら、この語も非飽和名詞として(少なくともその周辺的な事例として)認めるべきであろう。

また、非飽和名詞の中には個別の物や出来事だけでなく、物・出来事のタイプ(種類)を参照するものが存在する点も注目に値する(山泉 2010)。例えば、「犯人」は「この事件の犯人」のように個別の出来事を参照する。一方、「常習犯」は「万引きの常習犯」のように悪事のタイプを参照する³。同様に、「専門店」は「釣具の専門店」のように物のタイプを指定しなければならない。この種のもは非飽和名詞ではあるが、典型例からはやや外れる。これらのことを考慮しながら、飽和・非飽和の多義性を観察する。

多義性を指摘する上で、個々の例についての判断基準が必要である。さしあたって、以下の基準を用いる。まず、カキ料理構文に生起可能であれば非飽和用法を持つと認めよう。そして、次の(5a)のように一つの名詞のもとに複数の個体を(参照事項が異なっても)まとめて数えられる場合には、飽和用法を持つと認めることとする(cf. 山泉 2013)。

- (5) a. この部屋に、会社員が3人います。[それぞれ別の会社所属でも可]
b. *この部屋に、社員が3人います。[それぞれ別の会社所属の場合不可]

これに加えて、何も参照せず「[名詞]を集めて来てくれ」と命令すると不条理に響くかどうか、単に「あれは／あの人は[名詞]ですか」と尋ねられた場合に答えに窮するかどうかといったことも飽和・非飽和を直感的に判断するのに役立つ。

もちろん、これらの基準は完全なものではなく、判断が難しい例や個人によって揺れる例もある。飽和・非飽和の区別が捉え方に基盤を持つ柔軟なものであるという本発表の立場からは、明確に判断しにくい場合が存在することは自然なことだと言える。

4. 飽和・非飽和の多義性

本節では多義性の例を具体的に検討していく。

³ なお「犯罪者」は、どのような種類の犯罪行為かも、どの特定の事件かも問わず、とにかく犯罪を犯したことのある人を表す飽和名詞である。このような語義の住み分けは各言語の慣習に委ねられている。

■社長

「社長」は、西山(2003)が非飽和名詞の例としてあげているが、実は多義性を示す。(6a)のように、カキ料理構文に問題なく生起することから非飽和用法を持つことがわかる。同時に、(6b)のように別会社の社長であってもまとめて数え上げられることから、飽和用法も持つと言える。「彼のお父さん社長なんだって」と言うときの「社長」は飽和用法である。この点で、飽和名詞として使うことができない「社員」と顕著な対照をなす。

- (6) a. この会社は、山田氏が社長だ。 非飽和用法
b. この部屋に、社長が3人います。 飽和用法 [それぞれ別の会社の社長でも可]

このとき、飽和用法であっても、社長は必ずどこか特定の会社の社長であることに注意しよう。その人物がどこか特定の会社の社長を務めている必要はあるけれども、「どこの会社か」が問われないために、参照する必要がなく、飽和名詞として使うことが可能になっている。

類例をあげる。組織のトップを表す語は一般にこの多義性を示すものが多い。こうした例は、非飽和用法が基本的だと感じられる。

- (7) 社長、校長、所長、生徒会長、教祖、首相、大統領、知事、経営者

それに対して、「幹部」は飽和用法を持たない。「副大統領」などは判断が難しい。また、組織の中でも相対的な上下関係に基づく「上司」「部下」も飽和用法を持たない。組織のトップであっても、「班長」などのようにその組織が小規模なものや一時的なものである場合は飽和用法が難しいようである。

■母親

親族名詞の中にも飽和と非飽和両方の用法を持つ名詞が多くある。「母親」や「父親」は基本的には非飽和名詞だが、「あなたも1人の母親でしょう」などと言う場合には飽和名詞として使われている。「社長」の場合と同じく、飽和用法であっても「母親」で指示される人は必ず実際に誰かの母親である。類例として次のものがあげられる。なお「母親」と比較して「母」は飽和用法では使われにくいと思われる。

- (8) 母親、父親、ママ、パパ、お母さん、お父さん、長男、長女、末っ子、花嫁、御曹司

「おばあちゃん」などにも飽和・非飽和の多義性が見られるが、(8)とは区別されるべき現象である。この場合、飽和用法の「おばあちゃん」は、老齢の女性であれば孫がいなくても指すことができる。

- (9) おばあちゃん、おじいちゃん、おじさん、おばさん、お兄さん、お姉さん、おやじ、娘

■司会者

宮島(1997)は、「司会者」「指揮者」「解説者」の多義性を指摘している。例(p.168)

を見ると分かるように、これは本発表の非飽和用法と飽和用法に対応している。

(10) a. 結婚式の披露宴では、司会者も客も発言に気を使う。 **非飽和用法**

(「天声人語」1991年8月8日)

b. すでに60年代の初めから、いわゆるタレント議員が数多く出ている。独自の分野で特技を持っていた人たちだ。漫才師、作家、司会者、女優、スポーツ監督……。多彩である。 **飽和用法**

(「天声人語」1992年7月10日)

(10a) は特定のイベントの司会担当者を表す非飽和用法で、(10b) は職業としての司会者を表す飽和用法である。特定の出来事においてある役割を実際に担う人を指す非飽和名詞が、その役割を職業として(あるいは習慣的に)担う人を指す飽和名詞としても用いられる現象は多数見られる。これは、「社長」や「母親」の多義性とは質的に異なる。

(11) 司会者、指揮者、解説者、運転手、投手、ピッチャー、審判

西山(2003)のあげている「弁護士」の多義性も類似の現象である。ただし、職業的司会者でない人もイベントの司会を担当するのに対して、「弁護士」の場合、弁護人の役割を担うのは通常職業的弁護士に限られるという違いがある(このため、「司会者」類は非飽和用法が、「弁護士」類は飽和用法が基本的だと感じられる傾向がある)。

(12) 弁護士、声優、医者、先生⁴、秘書、カメラマン、カウンセラー、パイロット、コック

参考のため、以下に人を指す非飽和名詞で飽和用法を持たないものをあげておこう。

(13) 敵、ライバル、妹、いっこ、犯人、隊員、乗員、乗客、メンバー、ゲスト、客、ブレーン、取り巻き、子分、話し手、聞き手、見張り、スタッフ、幹部、ボス

■踏み台

物を指す名詞にも多義性を示す例が多数ある。「踏み台」は次のような多義性を示す⁵。

(14) a. 雑誌の束を踏み台に、棚の上に手を伸ばした。 **非飽和用法**

b. このお店には多種多様な踏み台が売っている。 **飽和用法**

地図をたよりに構文で用いられている(14a)は、それに乗って棚の上に手を伸ばすという事象に、踏み台の役割で実際に参与することによって初めて踏み台とみなされる用法であるため、非飽和である。一方、(14b)では、実際にその役割を果たすことは独立に踏み台とみなされる飽和用法と言える。このような、実際にある役割で関係に参与している物を指す非飽和用法と、その役割を果たすことを目的として作られた物の類を指す飽和用法の多

⁴ 「先生」は飽和用法の他に、参照事項の異なるいくつもの非飽和用法を持つ。「私の先生」「あの高校の先生」「体育の先生」など。「医者」も同様である。

⁵ この種の例については氏家(2017, 2021)でも詳しく論じた。

義性を示す名詞は多い。人の職業と物の機能の平行性 (Pustejovsky 1995) を踏まえれば、この現象は上の「司会者」類の多義性と本質的に同じだと考えられる。

(15) 踏み台、枕、武器、下敷き、しおり、肥料、おもちゃ、寝巻き、デザート

■ 宝物

「宝物」は高い価値を有する物を一般に表す飽和用法と、特定の人や共同体が大切にしている物を表す非飽和用法がある (例: 「この写真が私の宝物です」)。飽和用法であっても、その理解には「(一般化された) 人々がそれを大事にする」というフレームが含まれている点が重要である。このように一般化された主体を個別の主体へと特定化したものが非飽和用法にあたる (氏家・田中 2021)。他にも、「家」「道」「教科書」「舞台」「チケット」「お土産」など検討を要する多義語は多い。これらについては別稿を期したい。

5. カテゴリー化の2つのモデル

飽和名詞・非飽和名詞の区別をレキシコンにおける二値的な素性と考えると、飽和・非飽和の多義性が体系的かつ大規模に見られるという事実を扱うことができず、単に項目をリストするだけになってしまう。そこで、飽和・非飽和の区別は話者が名詞を使用する際のカテゴリー化の働きに由来すると考えたい。犬の個体を指して「あれは犬だ」と言ったり、「犬が寝ている」と言ったりするとき、その対象に名詞「犬」と結びついたカテゴリーを適用している。言い換えれば、犬とみなしている。このように、「何かを X とみなす」という働きをカテゴリー化という。名詞による対象のカテゴリー化の典型的なモデルの1つは、類概念を用いたものであろう。〈犬〉という類の概念を使って、その類の事例とみなせる対象を犬としてカテゴリー化する。これを類・事例モデルと呼ぶ。もう1つの典型的なモデルは、フレームを用いたものである。フレームとその中の役割の概念を個々の状況に適用することで、状況中の対象をその役割に当たるものとしてカテゴリー化するのである⁶。例えば、ある犬を〈飼い主とペット〉のフレームを利用して太郎のペットとしてカテゴリー化するのがこれに当たる。これをフレーム・役割モデルと呼ぶ。言語使用者はこの2つのモデルを柔軟に使い分けている。

類・事例モデルによるカテゴリー化においては、対象が類概念の指定する諸特徴に当てはまるかどうか主に主に関心がある。それに対して、フレーム・役割モデルによるカテゴリー化では、対象が状況の中で他の事物と形作る関係に関心がある。とはいえ、これら2つのモデルは相互に複雑に絡み合っている。重要なのは、類概念にもフレームの知識が含まれており、フレームにも類が関与しているという点である⁷。これにより2つのモデルは対立しつ

⁶ Fillmore and Baker (2009: 6f) は、英語の名詞 pedestrian (歩行者) と Norwegian (ノルウェー人) を対比している。交通空間で車と歩く人が交錯するようなフレームと結びついている pedestrian は、目下の状況でその役割にあたる人 (a person in a currently-relevant role) を指し、人の類の事例 (a member of a category of persons) を表す Norwegian とは異なるという。これは本発表のフレーム・役割モデルの典型例である。

⁷ 例えば〈犬〉という類の知識にはしばしば人によって飼われるという知識が含まれている。また、〈飼い主・ペット〉のフレームの知識には人や犬の類の知識が関与しているだろう。

つも連続体をなす。そのため全体としては同じ内容を持つ概念を、捉え方次第で類として利用したり役割として利用したりする可能性が生まれる。

名詞の意味にはカテゴリー化の様式がある程度慣習的に組み込まれている。飽和名詞は類・事例モデルを慣習的に組み込んだ名詞であり、非飽和名詞はフレーム・役割モデルを慣習的に組み込んだ名詞である。飽和・非飽和が定まった名詞も多いものの、あくまで使用におけるカテゴリー化に根差した区別であるために、柔軟さを示す。言い換えれば、飽和名詞・非飽和名詞の対立よりむしろ飽和用法・非飽和用法の対立の方が基本的なのである。

6. 類とは何か

「社長」「司会者」「踏み台」などの名詞が非飽和名詞としての用法だけではなく飽和用法を持つのはどうしてだろうか。それを明らかにするには、類の性質を考える必要がある。類の存在意義は、世界に見出される特徴間の自然な相関関係を利用して、対象の性質やふるまいの予測を可能にすることにある (Rosch et al. 1976)。たとえば、〈鳥〉という類概念があるおかげで、ある対象が羽毛に覆われていて空を飛ぶならば、かなりの確信を持ってそれは卵生であると予測できる。類はこのように、ある特徴から別の特徴への予測を可能にしてくれる。有用な類の条件の一つとして、内部 (各成員) が均質的であることがあげられる。

一方、フレーム・役割モデルによるカテゴリー化は多くの場合、対象の同質性を保証しない。例えば〈飼い主とペット〉のフレームにおけるペットの役割を考えよう。太郎の飼っているインコと、花子の飼っているミドリガメは内在的な共通点が少ない。これは、フレーム・役割モデルは対象そのものの特徴よりも関係に関心があるためである (誰かに飼われているという点は共通している)。

しかし、中には、対象そのものの性質をある程度予測可能にするようなフレームもある。〈企業とその社長〉のフレームはそうしたフレームの1つだろう。どこかの企業の社長であるということがわかれば、それだけでその人の特徴 (裕福であることや権力を有することなど) がある程度予測できるからだ。これが、「社長」が飽和用法を持つことの理由である。一般に、非飽和名詞の依拠するフレームが参照事項によらず指示対象の特徴の予測を可能にする場合、その名詞は飽和用法を持つ可能性が高いと仮説を立てることができる。「敵」や「いとこ」が飽和用法を持たないことはこれによって説明できる。ある人が誰かの敵やいとこであると分かっただけでは特徴がほとんど予測できないからである。

「司会者」の場合に見られる特定のイベントの司会を担当する人と職業的司会者の多義性は、これとは異なる原理に基づいている。一般に職業は人の諸特徴 (社会的身分、生活様式など) を、かなりの程度決定づけるものである。そのため、特定の出来事に参与している (した) という事実だけではその対象の特徴が予測できないとしても、それを職業としていると分かれば、十分な予測が可能になる。〈イベント・司会〉フレームはそれだけでは指示対象について多くのことを教えないが、このフレームへの参与を職業としているとなれば、その人の特徴が十分にわかるため、類となりえている。「踏み台」類の飽和用法も同様に説明できる。専用に作られた踏み台は形状など多くの特徴を共有するため、一つの類となる。

7. おわりに

本発表では飽和名詞と非飽和名詞の多義性について考察した。飽和・非飽和両用の名詞の例を観察し、概念的基盤としてカテゴリー化に関する類・事例モデルとフレーム・役割モデルの区別を提案することで、多義性の理由を説明できることを示した。この原理によって一定の説明が可能になるとはいえ、「会社員」と「社員」の使い分けのように各言語の慣習に委ねられている部分は大きい。辞書の記述の上でも、それぞれの語が飽和用法を持つかどうかといった事柄は見過ごしではならない情報である。

参考文献

- Fillmore, Charles J. and Collin Baker (2009) A frames approach to semantic description. In: Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.) *The Oxford handbook of linguistic analysis*. Oxford: Oxford University Press.
- 庵功雄 (1995) 「語彙的意味に基づく結束性について：名詞の項構造との関係から」 『現代日本語研究』 2: 85-102. 大阪大学.
- 菊地康人 (1997) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文の成立条件」 『広島大学日本語学科紀要』 7: 89-107.
- 宮島達夫 (1997) 「ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス」川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』 157-171. 東京: ひつじ書房.
- 三宅知宏 (2000) 「名詞の「飽和性」について」 『国文鶴見』 35: 89-79.
- 三好伸芳 (2017) 「カキ料理構文における「XのZ」の意味的性質」 『日本語文法』 17 (2): 81-97.
- 西山佑司 (1990) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文について：飽和名詞句と非飽和名詞句」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 22: 169-188.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』 東京: ひつじ書房.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press, Cambridge.
- Rosch, Eleanor, Carolyn B. Mervis, Wayne D. Gray, David Johnson, and Penny Boyes-Braem (1976) Basic objects in natural categories. *Cognitive Psychology* 8: 382-439.
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」 『日本語・日本文化』 4: 71-119. 大阪外国語大学留学生別科.
- 氏家啓吾 (2017) 「「地図をたよりに」構文と非飽和名詞」 『東京大学言語学論集』 38: 287-301.
- 氏家啓吾 (2021) 「接しかたと名詞の意味論」 『日本認知言語学会論文集』 21, 128-137.
- 氏家啓吾・田中太一 (2021) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文への認知文法的アプローチ」 『東京大学言語学論集』 43, 327-347.
- 山泉実 (2010) 「節による非飽和名詞(句)のパラメータの補充」 東京大学大学院総合文化研究科博士論文.
- 山泉実 (2013) 「非飽和名詞とそのパラメータの値」 西山佑司 (編) 『名詞句の世界』 11-27. 東京: ひつじ書房.